



クリエイターの心に突き刺さる「事件」を巻き起こす製品を目指せ

【浜松市発】「大事なものは情熱と謙虚と素直」。蓑輪さんはそう語る。基本は相互をリスペクトすること。イエスマンでは意味がない。情熱を持って自分がベストだと思う案を互いのテーブルの上に乗せる。相手の意見に謙虚に耳を傾け、判断する。決まったら、バイアスなく、過去の成功体験も関係なく、素直に実行する。これで総じてうまくいくと話す。ここで一番難しいのは「素直」。成功体験が積み重なり、年を取るごとに難しくなってくる。激しい時代の節目にあって、素直になれることは大きな才能だ。

(本紙主幹・奥田芳恵)

AIによる作曲支援 年代ごとに反応は両極端

奥田 昨今のAIの進化は目覚ましいものがあります。音楽の世界はどう変わりそうですか？

蓑輪 音楽制作のハードルがものすごく下がります。音楽が聞ける環境にある人の中で、音楽を聞くのが嫌いという人は、世界中でわずか1割くらいでしょう。残り9割が、音楽を聞くのが好きな人たち。彼らが一歩前に出ることで、クリエイターにもなれる、という環境が整い始めています。

奥田 まず何から入れば、一歩前に進めますか。

蓑輪 AIにアレンジさせてみてはどうでしょう。例えば、「Let It Beのテイラー・スウィフトバージョンをつくって」とやればできる時代です。それをもとに自分なりに曲がアレンジできるようになれば、もう立派なクリエイターです。

奥田 音楽制作にAIを取り入れるとなると、年代によって受け取り方も違ってきそうですね。

蓑輪 例えば、ローランドとソニーコンピュータサイエンス研究所(ソニーCSL)さんと共同でつくってきた「Melody Flip」というAIアシストによるメロディ生成ソフトウェアがあります。ソフトウェ

アの正式公開を前に、いろいろな年代の方にテストで使っていただいているんです。20代の方は「これ、すぐに自分の作品づくりに使いたいです」と、ものすごい食いつきなんです。AIをベースに、どう自分のクリエイティビティーが加速できるか、ということが分かっている。素直なんです。私みたいなおじさん世代は「あーおもしろいですねー」で終わってしまうんですが(笑)。

奥田 AIが仕事を奪う、という話もあります。音楽の世界もそうなっちゃいませんか。

蓑輪 どんなにロボットが進化して、楽器まで自在に弾けるようになったところで、私たちの「楽器を弾きたい」という潜在的な欲求は決して満たされません。その代わり、AIの助けで弾けるようになるまでにかかる時間、いわゆる「ラーニングカーブ」を短くすることはできると思います。これは私たちの使命でもありますね。

奥田 コロナ禍で楽器を始めた人も多かったと聞きます。

蓑輪 すごく売れたんです。ところがその後が続かず、止めてしまった人も多いんですよ。そんな人たちにも、ぜひまた楽器を手にしてほしい。楽器業界って、参入障壁は高い割にマーケットは小さい。ニッチな世界なので、家電やスマホなどに

比べて技術的進歩が遅いんですね。機能のアップデートをするにしても、いまだにパソコンでファイルをダウンロードしてUSBメモリーで、という世界。冷蔵庫にもWi-Fiが搭載される時代です。楽器も進化させなきゃいけません。

忘れかけていた 「未来をデザインする」仕事

奥田 ずっとローランド一筋でここまで来られたわけですが、そもそもの入社のかっけは何だったんですか。

蓑輪 昔からモノをつくるのが好きで、建築にも興味がありました。ただ、バンドをやっていたこともあって、自分が進むべきは音楽関係だろうと。ミキシングエンジニアを目指すことも考えたんですが、専門学校に行くほどの勇氣はありませんでした。シンセサイザーをつくる、ということにも興味があって、電子工学かとも思いました。結局、情報学部を選び、プログラミングなどを学ぶことにしました。新設のキャンパス・学部の1期生で、1992年のことでした。普及前夜のインターネットにも力を入れている大学で、当時の最新技術が学べたのはラッキーでした。



PROFILE 1972年12月、千葉県生まれ。96年、明星大学情報学部卒。同年、ローランド入社、開発部門に配属。国内マーケティング部門、海外マーケティング部門を経て、2016年、RPGカンパニー企画部長。17年、執行役員RPGカンパニー社長に就く。22年、取締役CIOに就任。24年、代表取締役COO兼CIO、代表取締役社長CEO兼CIOを経て25年から現職。趣味はシンセサイザーなどのキーボード演奏、バドミントン。

構成・撮影／道越一郎
text and photo by Ichiro Michikoshi

2026.5.21 / 静岡県浜松市のローランドグローバル本社・R&D ショールームにて



奥田 「Windows 95」発売当時に学生だったわけですか。一番ホットな時期ですね。就職活動はいかがでしたか。

蓑輪 いわゆる氷河期で結構大変でした。新設学部なので先輩もいない。ただ、インターネットを学んだことが強力な武器になりました。そんな中、電子楽器、コンピューター、テクノロジーを結び付けてビジネスを展開するローランドもいいなと。好きなことが仕事にできるかもしれないと思い、受けてみることにしました。インターネット系企業の選考も進んでいましたが、ローランドからの採用の知らせを聞いて即決。就職活動を終了しました。

奥田 そこから社長まで駆け上がっていかれたわけですね。

蓑輪 駆け上がりたと思ったことは一度もないんですが(笑)。2022年にゴードン・レイズン氏が社長に就任するにあたって、すでに「次は蓑輪にバトンを渡すから」と言われていました。覚悟はしていましたが、初めて部下を持ってから、8年ほどしか経っていなかったんです。経営者として、なかなか追いつけていない部分はあるかもしれません。

奥田 社長に就任されて、まず何から手を付けたんですか。

こぼれ話

ふと鮮やかなオレンジに目が留まり、「ローランド色ですか」と話題を足元に向ける。ローランドとニューバランスのコラボスニーカーをカッコよく履きこなす蓑輪雅弘さん。新幹線などで同じように声を掛けられることがあるそう。ローランド愛が交差する素敵な瞬間を想像し、心が温かくなる。

ローランドは1972年創業以来、とがった製品を世に送り出してきた。復刻、再生産をよしとしない以上、いつも過去を越える、もしくは違うアプローチでアーティストに刺激をもたらしてきた。アーティストに寄り添うとか、支えるという表現が少ししっくりこないのは、いつも何らかの刺激を与える存在を目指しているからだ。

アーティストに挑むローランドと、それに応えるアーティストの無言のやり取りが、音になって現れる。いつも真剣勝負しているようだ。50年以上の歴史を重ねるローランドを決して古くしない大切なポイントなのだろう。

私は、残念ながら楽器の演奏から離れて久しい。ただ、いつも楽器に触りたいという欲求が心の中にあるのを感じている。上手に演奏できなくていい、まずは触って遊びたい、そんなレベルだ。中断してしまった



習慣を取り戻すのは、ちょっとしたきっかけが必要だ。蓑輪さんがおっしゃるとおり、AIでラーニングカーブが短くなり、勤を取り戻す時間が短くなるとすれば、再開のハードルは下がるのかもしれない。

情熱、謙虚、素直。蓑輪さんは大切にしていることをいつも社員に伝えているという。私は頑固だね、と言われることがよくある。往々にしてよくない意味の気がする…。素直じゃない自分と素直でありたい自分が行ったり来たり。素直でいられるか、いつも挑戦を受けているような気がしている。素直って難しいよね、という蓑輪さんの言葉に少しほっとしながら、素直さの挑戦を受け続ける覚悟を新たにした。いつか自分の思考と行動に素直がなじむといいなあ。(奥田芳恵)

蓑輪 もう一度「WE DESIGN THE FUTURE」に立ち返ろうと思いブランドメッセージとして掲げました。これは元々70～80年代に主に米国で使っていたブランドメッセージです。ローランドは、創業時からのフィロソフィーとして、過去の機種 of 単純な復刻、再生産はNGなんです。とはいえ、お客様が復刻を望む製品もある。実際、14年からは、昔に人気のあった製品を今風にアップデートして発売しています。おかげでブランド評価はぐっと高まりました。一方で過去への回帰という側面も否めない。

奥田 普通の会社なら、売れた製品の二番煎じ、三番煎じは当たり前じゃないですか。

蓑輪 常に新しい技術を取り入れてアーティストに刺激をもたらすのが、電子楽器の歴史であり仕事です。過去売れたものに拘泥して踏みとどまる、というのは会社の死を意味します。創業時のフィロソフィーはそんな意味だと思って大事にしています。そこでもう一度未来をデザインしようと。手始めに米ロサンゼルスを中心に「Roland Future Design Lab」という研究組織を設立しました。最先端のイノベーションと世界中の音楽クリエイターを結び付け、ユニバーサルミュージックグループとともに、クリエイターの権利保護を目的とする「AIによる音楽創造のための原則(Principles for Music Creation with AI)」を推進しています。

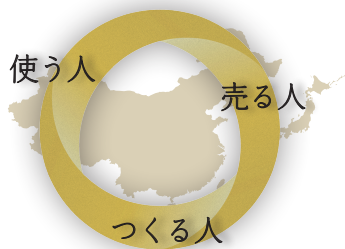
奥田 これからローランドはどう進化していくんでしょう。

蓑輪 先日あるミュージシャンにお会いした時に

「良くも悪くも、毎回ローランドの新製品発表は事件だった」というお話を伺ったんです。「スゲーな」と「ダメだな」が入り混じっていたと。使いにくくてクレイジーだけど音はピカイチだったり。触ると刺激、インスピレーションが湧く存在。でも「昔に比べると事件性が減ってきたね」との苦言もいただきました。やっぱり未来に視線を向けるべきだという考えは同じ、ということがよく分かりました。

奥田 私たちをびっくりさせる、とがった製品、楽しみにしています。

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意(おもい)が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰(対談連載)」で公開中です。
<https://www.bcnretail.com/hitoarite/>